

ストックホルム・パリ研修 報告書

1. 研修の様子と成果

本研修は、研究発表を中心として研究にかかわる交流の機会、および研究対象ともかかわりの深いヨーロッパの生活世界や文化・歴史に触れる機会を提供するものであり、極めて意義深いものと感じられた。

研究にかかわる交流には二つの機会が与えられていた。第一に、議論の背景や主流となる論者が異なるスウェーデン・フィンランドの研究に触れつつ、自らも発表することができた。セッションを通じてとりわけ印象的だったのは、多様性を含む教育の問題にアプローチする際の視点の多様さ・独自性である。こうした多様さ・独自性を尊重するなかでは、個々人の、あるいは方法領域ごとの研究上の悩みや課題に取り組み越えようとする際の手掛かりが得られるのではないだろうか。同時に、ストックホルム・フィンランドで研究を行う人々から研究の意義を汲み取ってもらう経験は、議論の異なる文脈を越えて、教育学研究の重要な問いがあることを理解する重要な契機でもあった。加えて第二に、研修の中心となるジョイントセミナー以外の場面でも、大学見学・学校訪問、また他大学の学生との交流を通じて、スウェーデン・フィンランドの教育現場を見聞きすることができた。北欧の教育を実際に見る貴重な機会となるとともに、同じ院生の研究や生活の様子、モチベーションなども聞くことができた。

ヨーロッパの生活や文化、歴史に触れるという意味では、とりわけフランス・パリで学ぶものが多かった。報告者が研修で報告した研究では、キリスト教の教会改革および修道院改革運動を背景に重要な思索対象とする思想をあつかったため、自由時間を使って、パリで非常な権力を持った教会の各時代の重要な史跡を見学できたことはきわめて意義深い。研究の最終的な成果報告に向けても、思想や概念への理解をより深めることができるように感じた。と同時に、そうした土地のただ中で二つの異なる国際機関を訪れ、話しを聞くことは非常な刺激になった。教育にかかわる国際機関が、それぞれ異なる背景とインタレストを持ちつついかに連携してきたのか、また幼児教育への取り組みについて紹介されたように、いかにある一つのプロジェクトが始められ、広がっていくのか、といった観点から教育をめぐる情勢の機制そのものへ理解が深まった。とりわけ OECD では参加学生の関心も尊重しつつ最新の成果を聞くことができ、自身の研究でも中心に据えている学習と能力をめぐる問いにも示唆を得たように感じている。

2. 今後の希望

シンポジウムにかんしては、教育の諸方法領域が混在する構成であったため、全体討議であれ各人の内省においてであれ相互に位置づけあうことの意味が明確に感じられた。ただし、教育をめぐる状況や社会の情勢など、各自の研究の背景にかんする知識が浅い場合には、「それぞれの研究発表の関連を見出し整理しよう」とセッションの進行役が提出した課題に応えることが難しく感じられた。自身の知識・準備が現実の教育の問いに取り組むうえではまったく不足していることを改めて認識する機会であった。ただしこの点について、研修に先立って本所恵氏を招き東京大学で行われたセンター主催のセミナー「スウェーデンの高校教育」に参加できなかったことがセンターの年間を通じたプログラムにおける院生の研究・教育支援という意味で影響していると考えられる。したがって、本来研修参加者に求められるべきではあるが、もしスウェーデンおよびフィンランドへの事前理解を深められる機会がより提供されれば、研修での交流がより素晴らしいものになるのではないかと。

セッションの構成については、可能なら全てのセッションに三大学の発表が満遍なく分けられているとよりよいように思う。というのも、今回参加したセッションでは東京大学とフィンランド・ユヴァスキュラ大学の学生の発表が多くを占め、三大学とその背景である三ヶ国の広がりを感じることが比較的難しかったためである。

キャンパス・ツアーについては、異なる国の大学を見ること自体が興味深い経験だったが、もしそれぞれの研究において参考になるような場所をより時間をとって見るあるいは使用する機会があるなら、短期間の滞在で各大学そのものからも学ぶことができるという意味で、素晴らしいものになるのではないかと。たとえば図書館については、もし非在籍者でも使用してよいのなら、開館時間・配架の案内などの簡単な情報へのアクセスを示すなどがあれば、非常に短い滞在のなかで大学の研究環境を効率的に享受し理解できるように思われる。文献研究に限らず、たとえば留学生支援を行う部局など、研究の内容とかかわる大学の部分を可能な範囲で見ることができれば、各大学の紹介プレゼンテーションと合わせてより意義深いものになるのではないだろうか。

そのほか、スウェーデンとフランスを約1週間の日程で周る際、ストックホルムーパリの移動日のスケジュールが過密で、体調不良者が出たことに多少影響したのではないかと思われた。ただし、ストックホルムでの大学見学・学校見学・シンポジウム、およびパリでの二機関の訪問は非常に有意義であり、いずれの方法領域であれ学びがあるものと思われるため、ぜひこの充実した研修内容を来年以降も学生に継続して提供してほしいと思う。